

海陽町の野鳥

鳥類班（日本野鳥の会徳島県支部）

東條 秀徳* 三ツ井政夫 濱田 宏 白石 久男 四宮 康平 三宅 武
高井 正明 山下 拓巳

要旨：海陽町は、標高0～1300m超、面積約328km²の自治体で、四国の南東部に位置し太平洋に面している。2018年9月～2020年8月の2年間、海陽町全域で野鳥の生息調査を実施し、クマタカ、ヤイロチョウなど野鳥173種と外来種5種を確認した。その内、シラコバトとシベリアジュリンは徳島県内初確認の種で、43種が国または徳島県のレッドリスト掲載種であった。

キーワード：海陽町、クマタカ、ヤイロチョウ、シラコバト、シベリアジュリン

1. はじめに

海陽町は、四国の南東部に位置する面積約328km²の自治体である。北部は最高標高1300m超の山地で、その間を海部川、穴喰川、野根川、伊勢田川などの川が南流し、川沿いに形成された平地に集落が形成され、農耕が営まれている。南部は太平洋に面し、水床海岸などの岩石海岸と、大砂海岸や大里海岸などの砂質または礫質海岸となっている。町面積の9割以上が林野で、その75%が杉・桧などの人工林である。自然林の主要な植生は、山地の南面斜面や急斜面がタブ、アカガシ、モミ、ツガなどの混交林、海岸部がウバメガシ主体の混交林である。また、大里海岸には延長約4kmの防潮林が維持され、クロマツ、クスノキ、ヤマモモなどが植栽されている。各河川には取水堰はあるがダムは無く、流れは中流から海へ即流入している。調査期間中、海部川、穴喰川だけでなく小河川でも、河川内に繁茂した植生や堆積した土砂を取り除く工事が行われていた。浅川湾と那佐湾の奥に小規模な干潟があり、浅川湾の南には県内最大面積の自然湖である海老ヶ池がある。農地の多くは区画整理されており、稲作一毛田

となっているが、山間部を中心に耕作放棄地も多い。

鳥獣保護区として、海部川河口、母川、那佐湾等が含まれる^{ともおく}鞆奥（600ha）と、北部山地の轟（770ha）が指定され、旧海南町域の海岸、旧穴喰町域の海岸^{ししくい}および穴喰川下流域の平地が特定猟具使用禁止区域となっている（徳島県2019 令和元年度徳島県鳥獣保護区等位置図）。

調査期間の2年とも高温傾向であり、さらに台風および集中豪雨による災害も発生した。また、海岸沿いの照葉樹林でナラ枯れが拡散し始めている。

さらに、2020年5月、海陽町那賀町境の海部山地に大規模風力発電施設建設設計画が発表された（徳島新聞、2020年5月9日）。

本調査は、海陽町の各種環境における、現在の野鳥生息状況を把握することを主たる目的として実施した。

2. 調査方法

2018年9月から、町内在住1名を含む支部会員8人が、町内全域を対象に観察した。なお、海部川河口、集落周辺5カ所、農耕地2カ所および大里松原

* 〒770-8025 徳島市三軒屋町外24-77 088-669-3750

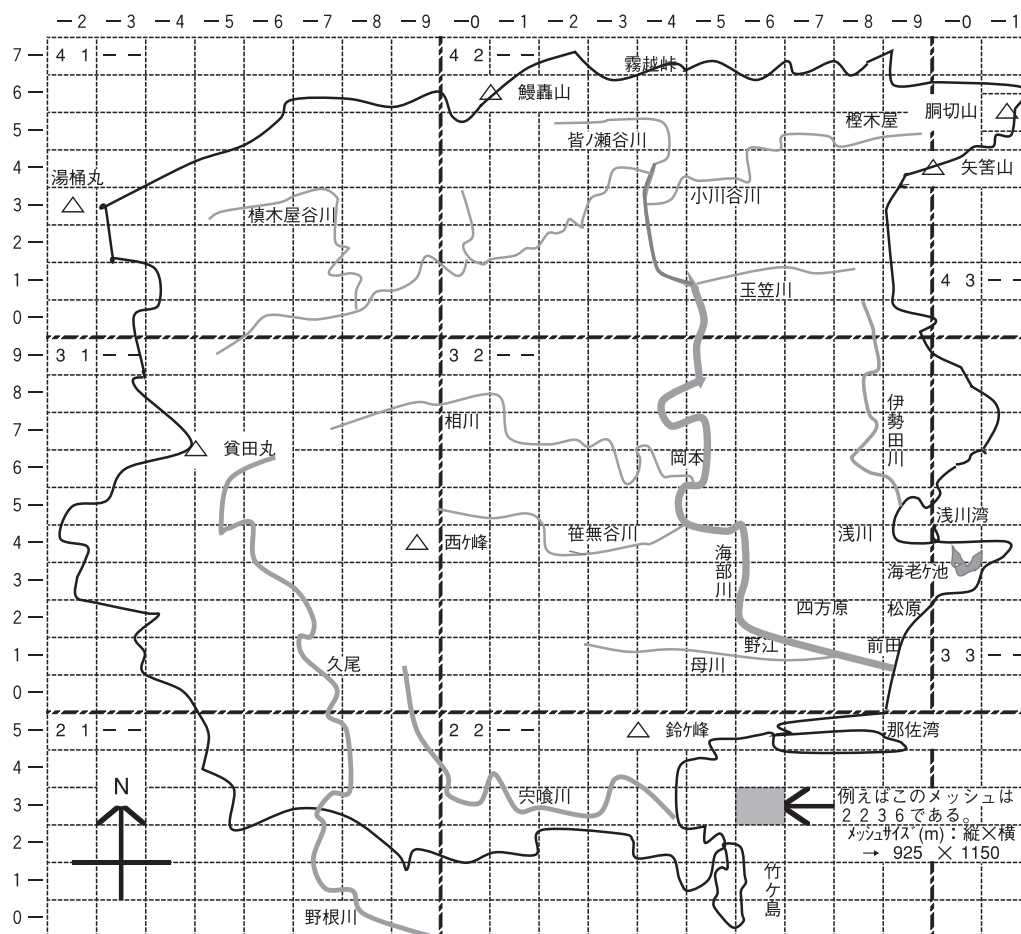


図1 海陽町調査用メッシュ地図

に調査定線を設定し、原則月1回の周年観察を実施した。また、海老ヶ池地区で毎月1回定期観察会（探鳥会）を継続しており、その記録も採用した。双眼鏡または望遠鏡で目視、あるいは特徴的な鳴き声で確認した種名と個体数を記録するとともに、可能な限り写真記録も残した。観察地については、地名の把握が困難な地もあり、従来より都道府県メッシュマップの3次メッシュコードを併記している（図1）。

観察時に遭遇することもあり、野鳥との補食関係、植生等野鳥生息環境への関与が考慮されることから、野生哺乳類についても記録した。

3. 山地・森林の記録

森林が町面積の約75%、海岸から標高1300m超までと面積・高度差とも大きいことから、山地・森林環境においても多種の野鳥が記録された。本稿では特記事項として、複数種の生息状況とタカの渡りを

記載する。

1) クマタカおよびヤイロチョウ

クマタカ（写真1）は国内最大のタカで、森林生態系の最上位に位置する留鳥である。ヤイロチョウは高知県の県の鳥に指定されている夏鳥で、やや薄暗い森林に夏鳥として渡来する。両種とも、環境省レッドリストで絶滅危惧ⅠB類に指定されている。

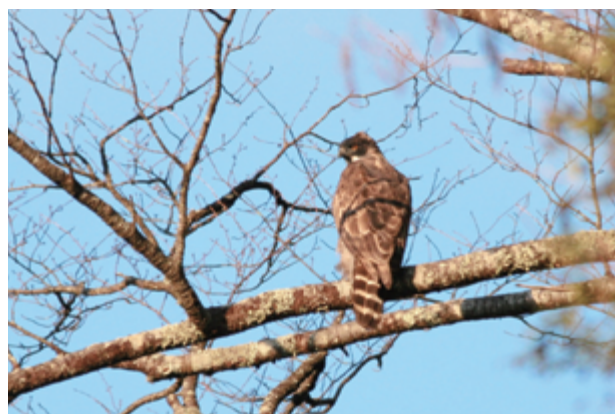


写真1 クマタカ

ともに那賀町境の北部山地での観察記録が多く、ほかに中部山地でも生息を確認した。海陽町の北隣の上那賀町の調査（増谷ほか 1989）においても、今回の生息確認地に近い町境山地で両種の生息が確認されている。これらは、絶滅危惧ⅠB類の2種が当地域の山林を継続して利用し、両種の重要な生息環境であることを示唆している。

2) リュウキュウサンショウクイ（写真2）

本種は、種サンショウクイの亜種であり、近年徳島県内で生息域を拡大している。本調査でも、海岸から那賀町境までの広範囲の山林で周年確認された。

3) ミサゴの営巣

ミサゴは魚食性の大型のタカで留鳥として生息する。海岸の岩棚や松の樹上での営巣が知られていたが、近年では内陸での営巣が確認されるようになっている。今回の調査では、海岸近くの低山尾根上のアカマツでの営巣を確認した。なお、2019年に確認した巣はその秋の台風で消失し、2020年の再建はなかった。同ペアによるものかは不明だが、2020年は約1 km東の尾根のアカマツでの営巣を確認した。

4) フクロウおよびアオバズク

フクロウは留鳥として、小型のフクロウ類アオバズクは夏鳥として渡来し、おもに夜に活動する。両種とも、主要な繁殖環境は大木の樹洞である。今回の調査では、平地集落近くの山林で生息を確認した。

5) ソウシチョウおよびヒゲガビチョウ

両種とも特定外来種に指定されている。阿波学会調査では、前者は旧東祖谷山村の調査（東條ほか1997）以降各地で記録があり、後者は鳴門市の調査（東條ほか2009）で記録されている。今回調査では、ソウシチョウ（写真3）は町内各地で確認され、ヒゲガビチョウは那賀町境の杉植林地で確認された。

6) タカの渡り（写真4）

サシバやハチクマなど多くのタカ類も、ツバメ類やカモ類など同様に、南の越冬地と北の繁殖地を移動する渡りを行う。海陽町においても、山地や海岸でタカの渡りが確認されている（日本野鳥の会徳島県支部1993）。今回は霧越峠で観察した。当地では、1993年10月9日にサシバ195羽、ハチクマ15羽が記



写真2 リュウキュウサンショウクイ

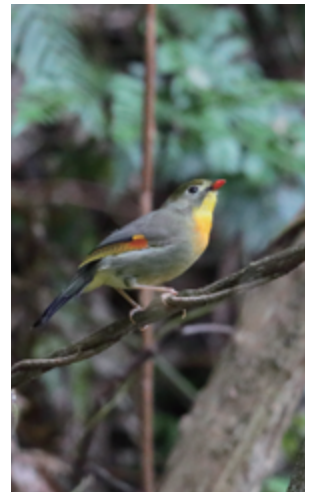


写真3 ソウシチョウ



写真4 上空で帆翔するサシバ

録されている。2019年10月4日にはサシバ49羽、ハチクマ4羽、ノスリ、ツミ、オオタカ、チゴハヤブサ各1羽。10月5日にはサシバ51羽、ノスリ1羽、ツミ2羽。10月6日にはサシバ39羽、ハチクマ4羽、ハイタカ1羽を記録した。東へ向かう越冬個体と思われるハイタカも2018年10月20日に7羽、2019年10月6日に2羽記録している。一方、同所で春期にも観察したが、2020年5月2日にサシバ2羽ノスリ1羽を認めたのみであった。

4. 河川・溪流の記録

海陽町を代表する自然環境である海部川の河口と、その上流や支流、宍喰川、野根川および伊勢田川でも随時観察した。

1) 海部川河口

海部川には取水堰と砂防堰はあるものの流水が滞留するダムが無く、日本有数の清流で知られる。流

路は河口まで中流の様相で、流れは速いが水量の変動が大きく、冬期には相川から吉野付近で断流も認められ、太平洋に注ぐ河口も閉塞することがあった。

本調査では、海部川右岸の車道と河川敷を、国道から海までの間で往復し、上空を含む河口域を観察した結果、随時観察を含め次の49種の野鳥と外来種の下バトを確認した。

オカヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、トモエガモ、コガモ、ホシハジロ、ウミアイサ、カイツブリ、キジバト、カワウ、アオサギ、ダイサギ、コサギ、オオバン、アマツバメ、ヒメアマツバメ、イカルチドリ、コチドリ、イソシギ、ウミネコ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ミサゴ、トビ、オオタカ、カワセミ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ツバメ、イワツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、メジロ、オオヨシキリ、ムクドリ、ツグミ、ジョウビタキ、イソヒヨドリ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、タヒバリ、カワラヒワ、アオジ、オオジュリン。この中で、中流の礫河原を生息環境とするイカルチドリ（写真5）の生息は、前述したように海部川が中流のまま海に流入していることと一致する。



写真5 河原を歩くイカルチドリ

2) 海部川中上流および他の河川

これらの河川の野鳥生息状況の特記事項として、ヤマセミ、カワガラス、オシドリ、イワツバメ、カワウの生息状況を取りあげる。

ヤマセミは、溪流生態系の豊かさを象徴する大型のカワセミ科の留鳥であり、徳島県レッドリストで絶滅危惧ⅠB類に分類されている。本調査では海部

川上流で生息を確認した。豊かな清流海部川を示唆するものである。一方、過去には伊勢田川、宍喰川、野根川でも生息記録（徳島県・（財）日本野鳥の会徳島県支部 第7次鳥獣保護事業における鳥獣生息状況報告書）があるが、今回は確認できなかった。過去に生息記録がある阿波市、阿南市、三好市などでも、近年実施された阿波学会調査では確認できていない。

カワガラスも溪流を代表する留鳥であるが、海部川の中流以上の本支流と宍喰川、野根川で生息を確認した。

オシドリは、冬期にはナラ類やカシ類の堅果（どんぐり）を主要な餌とするカモである。海陽町では、アラカシ、ウバメガシ、コナラなどが斜面に生えた溪流の淵に越冬群を認めた（写真6）。本種は、県内でも少数が繁殖しているが、今回調査では繁殖は確認できなかった。

イワツバメの営巣（写真7）は、これまでも、海部川下流および伊勢田川において確認されている。今回調査では、これに加えて、海部川の清流橋、桑



写真6 溪流にオシドリの群れ



写真7 橋の下の巣のイワツバメ

原大橋と支流の相川大橋においても営巣を確認した。宍喰川では営巣を認めなかった。

カワウは魚食性の大型の野鳥であり、近年個体数を増加させ、分布域も拡大していることから、漁業者から有害視されている。本調査では、海部川中流で100個体以上の群れが確認され（写真8）、さらに上流や支流、野根川にも飛来し採餌行動が観察された。同じく魚食性のヤマセミ減少の一因となっている可能性がある。



写真8 河原と浅瀬にカワウの群れ



写真9 ヒドリガモ雄雌



写真10 クロサギ

5. 海岸・海洋の記録

主に、浅川湾、那佐湾、水床湾と大里海岸沖などで、冬期に、カモ類が11種確認され、その内、ヒドリガモ（写真9）、マガモ、カルガモ、ヨシガモでは個体数が比較的多数であった。地形的に人の視界からの隔離または距離の確保がなされているとともに、当地域が保護区または銃猟禁止区域となっていることもその要因であろう。さらに漁港付近でウミネコ、セグロカモメなどカモメ類が、比較的多数確認され、沖の岩礁上に、ヒメウ、ウミウ、クロサギ（写真10）などが休む姿を見かけた。浅川湾内の半島のウバメガシ林にカワウの冬^{ふゆねぐら}時が営まれ、その規模は約250羽であった。浅川湾および那佐湾の干潟には、春または秋の渡り時期に、コチドリ、メダイチドリ、アカアシシギ（写真11）、ソリハシシギなどシギ・チドリ類8種が訪れた。また、ウミガメ産卵地として車両の乗り入れが禁止されている大里海岸でコチドリの繁殖を確認した（写真12）。水床湾沖の島上空を群れ飛ぶアマツバメが観察されており、繁殖の可能性が示唆される。ミズナギドリ類などの外洋性の種は確認できなかった。



写真11 アカアシシギ



写真12 砂浜にコチドリ幼鳥

表1 集落周辺の定期観察記録の比較

	種 名	榎木屋	久尾	岡本	浅川	竹ヶ島
1	ヤマドリ	○				
2	オシドリ		○			
3	カルガモ		○	○	○	
4	キジバト	○	○	○	○	○
5	アオバト	○		○	○	
6	カワウ		○	○	○	○
7	ウミウ					○
8	ゴイサギ					○
9	アオサギ	○	○	○	○	○
10	ダイサギ			○	○	○
11	クロサギ					○
12	ヒクイナ			○		
13	オオバン				○	
14	ジュウイチ	○				
15	ホトトギス		○	○	○	
16	アマツバメ				○	○
17	ヒメアマツバメ			○		
18	キアシシギ				○	
19	ウミネコ				○	○
20	セグロカモメ				○	○
21	ミサゴ				○	○
22	トビ	○	○	○	○	○
23	ノスリ			○		
24	アカショウビン	○	○			
25	カワセミ		○		○	
26	ヤマセミ	○				
27	コゲラ	○		○		○
28	アオゲラ	○	○	○	○	○
29	チョウゲンボウ			○		
30	サンショウウイ	○	○	○		
31	モズ	○	○	○	○	
32	カケス	○	○	○		
33	ハシボソガラス	○	○	○	○	○
34	ハシブトガラス	○	○	○	○	○
35	ヤマガラ	○	○	○	○	○
36	シジュウカラ	○	○			
37	ツバメ		○	○	○	○
38	コシアカツバメ				○	
39	イワツバメ				○	
40	ヒヨドリ	○	○	○	○	○
41	ウグイス	○	○	○	○	○
42	エナガ	○	○			
43	メジロ	○	○	○	○	○
44	ミンサザイ	○	○			
45	ムクドリ				○	
46	カワガラス	○	○			
47	クロツグミ	○				○
48	シロハラ	○	○	○		○
49	アカハラ	○				
50	ツグミ		○	○		
51	ジョウビタキ	○	○	○	○	○
52	イソヒヨドリ		○	○	○	○
53	コサメビタキ		○			
54	キビタキ	○	○	○		
55	オオルリ	○	○	○		
56	カヤクグリ	○				
57	スズメ		○	○	○	○
58	キセキレイ	○	○	○		
59	ハクセキレイ				○	○
60	セグロセキレイ		○	○	○	
61	ビンズイ		○			
62	カワラヒワ	○	○	○	○	○
63	ホオジロ	○	○	○		
64	カシラダカ		○			
65	アオジ	○	○	○	○	○
	コジュケイ	○	○	○	○	
	野鳥種数	34	39	36	34	29

6. 集落の記録

海陽町の集落環境として、山地、中山間、海岸を抽出し、以下の5地区で周年観察を実施した（表1）。

1）榎木屋（標高約190～230m）

海部川の支流の榎木屋谷川の上流の盆地に位置し、斜面の畑としては柿畑や小規模な野菜畑が散在するが、耕作放棄地が目立つ。小規模な平飼い養鶏場も散在する。水田はない。

周年観察で34種の野鳥と外来種のコジュケイを確認した。水辺環境の種は4種で、ほとんどが森林性の種であった。以下の4集落で記録されたツバメ、スズメ、イソヒヨドリは確認できていない。

2）久尾（標高約170m）

下流が高知県を流れる野根川上流の谷底平野に位置する。民家は町道沿いに小街路を形成し、棚田では稲作が営まれており、一部で晩稲の古代米が作付けされていた。

周年観察で、39種の野鳥とコジュケイを確認した。水鳥および水辺の種が8種で榎木屋の2倍となっているが、水量豊富な野根川と水田の存在によるものと推察する。

3）岡本（標高約30m）

海部川支流相川の下流の盆地に位置する。集落は岡本山の南麓に形成され、盆地の南を流れる相川との間に、整然と区画された水田が広がる。水田では水稻の早期栽培が行われ、その期間は、耕作地周囲に防獣網が嚴重に張り巡らされていた。

周年観察で、36種の野鳥とコジュケイを記録した。冬期にノスリとチョウゲンボウ（写真13）の生



写真13 チョウゲンボウ

息を記録したが、これはまとまった乾田の広がりがあることによるものと考えられる。

4) 竹ヶ島

徳島県の最南端の島で、現在はコンクリート製の橋で四国本島と繋がっている。集落は島の北側の 2 カ所に形成され、その西側は漁港となっている。周囲は照葉樹林斜面と岩石海岸と海面である。耕作地としては小面積の家庭菜園が存在する。

当地の周年観察では、29種の野鳥を確認した。外海にも接していることから、他地区では確認されなかったウミウとクロサギを含む水鳥・水辺の鳥10種を確認した。

5) 浅川

浅川川の下流平野に形成された集落で、今回調査対象とした 5 集落の中では最大規模である。南北は照葉樹林の山林、東は浅川湾に接し浅川漁港となっている。観察範囲には小規模な水田と耕作放棄地が存在する。

周年観察で、34種の野鳥とコジュケイを確認した。小規模ながら水田と川があり、内湾にも面していることから、水鳥および水辺の種が12種と最多を記録した。

7. 農耕地の記録

比較的にまとまった広がりのある農耕地として、海部川下流左岸の四方原と、南岸の野江で、周年観察を実施した(表 2)。

1) 四方原

照葉樹林に覆われた低山と JR の鉄道に囲まれた平野の耕作地である。古くは江戸時代に開墾された農地で、現在はさらに整地された改良農地となっている。主に水田一毛作だが、一部では冬野菜の栽培も始まった。耕作放棄田も一部発生している。

周年観察で、39種の野鳥と外来種 2 種を確認した。水田地帯であり、カモ類、サギ類、クイナ類、シギ・チドリ類、セキレイ類など、水鳥または水辺環境を主要な生息環境とする種が16種、空中で飛翔昆虫などを採餌するアマツバメ類、ツバメ類が 5 種確認された。他は草原性あるいは林縁性の種であり、当地の環境が、秋から春は丈低い草原状の環境となることに起因しているであろう。冬期には、

表 2 農耕地の定期観察記録

No.	種 名	四方原	野江
1	キジ	○	○
2	カルガモ	○	○
3	コガモ	○	
4	キジバト	○	○
5	アオバト		○
6	カワウ	○	○
7	アオサギ	○	○
8	ダイサギ	○	○
9	チュウサギ	○	○
10	コサギ		○
11	ヒクイナ	○	○
12	オオバン	○	
13	ホトトギス		○
14	アマツバメ	○	
15	ヒメアマツバメ	○	
16	ムナグロ	○	
17	タシギ	○	○
18	クサシギ		○
19	ツバメチドリ	○	
20	ミサゴ	○	○
21	ハチクマ		○
22	トビ	○	○
23	ノスリ		○
24	チョウゲンボウ	○	○
25	モズ	○	○
26	ハシボソガラス	○	○
27	ハシブトガラス	○	○
28	ヤマガラ		○
29	ヒバリ	○	○
30	ツバメ	○	○
31	コシアカツバメ	○	
32	イワツバメ	○	
33	ヒヨドリ	○	○
34	ウグイス	○	○
35	エゾムシクイ		○
36	メジロ	○	○
37	オオヨシキリ		○
38	セッカ		○
39	ムクドリ	○	○
40	ツグミ		○
41	ジョウビタキ	○	○
42	インビヨドリ	○	
43	スズメ	○	○
44	キセキレイ	○	○
45	ハクセキレイ	○	○
46	セグロセキレイ	○	○
47	タヒバリ	○	○
48	カワラヒワ	○	○
49	ホオジロ	○	○
50	ホオアカ	○	○
51	カシラダカ		○
52	アオジ		○
	コジュケイ	○	○
	ドバト	○	
	野鳥種数	39	43

電柱上などで待機する小型猛禽類のチョウゲンボウがしばしば観察された。

2) 野江

海部川と母川に挟まれた平野の耕作地で、区画された一毛作田である。調査コースの南は母川旧河道に沿っている。照葉樹林と杉植林の低山を越えた南は那佐湾と太平洋である。

当地の周年観察では43種の野鳥と外来種のコジュケイを確認した。水鳥または水辺の種は14種で、過半は草原性あるいは林縁性の種であり、前述の四方原と似た結果であった。なお、当地では冬期に出現頻度が高かった猛禽類はノスリで、電柱上あるいは樹冠で待機する姿を確認した（写真14）。



写真14 ノスリ

3) 前田

南を海部川河口、北から東を集落で囲まれた平野の耕作地で、大里海岸の後背地である。2車線道路の北側農地は区画整備された水田で、一部で野菜の冬作も始まった。南側農地は未整備で休耕あるいは耕作放棄地が目立つ。当地は、県内では希な野鳥が渡来することが多い地域であり、随時観察を行った。

当地では、徳島県の初の記録となったシラコバト（口絵写真）やシベリアジュリン（口絵写真）のほか、湿地に渡来するタゲリ、ムナグロ、コチドリ、セイトカシギ、オオジシギ、タシギ、クサシギ、タカブシギ、イソシギ、ヒバリシギ、アカエリヒレアシシギ、ツバメチドリなど多種のシギ・チドリ類や、草原を主要な生息環境とするキジ、セッカ、ノビタキ、タヒバリ、カワラヒワ、ホオアカ、オオジュリンなどを確認している。

8. 大里松原の記録

当地は、「日本の松原100選」に選ばれ、潮害防備林・保健保安林にも指定されている長さ4km面積26haと県下随一の松原である（財団法人日本緑化センター 2007）。クロマツ、クスノキ、ヤマモモなどが植栽され、下草刈りや殺虫剤散布なども定期的に実施されているが、2018年秋の台風では多数の

風倒木が発生、2019年秋の台風では、高潮や高波により広範囲に海水が浸入し、多数のクロマツの葉が赤化し、クスノキやヤマモモは落葉した。当地の定期観察は、林内の遊歩道を北から南へ歩行し、原則月1回周年観察した。これに、夜間観察などの随時部分観察記録と、上空通過種を含め次の43種を確認した。

キジバト、カワウ、アオサギ、コチドリ、ヤマシギ、トビ、ツミ、アオバズク、アリスイ、コゲラ、アオゲラ、リュウキュウサンショウクイ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヤマガラ、シジュウカラ、ツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、エゾムシクイ、メジロ、ムクドリ、コムクドリ、アカハラ、クロツグミ、シロハラ、ツグミ、ジョウビタキ、イソヒヨドリ、エゾビタキ、コサメビタキ、キビタキ、オオルリ、スズメ、キセキレイ、セグロセキレイ、ビンズイ、カワラヒワ、シメ、アオジ、ホオジロ。

確認種数は、留鳥に冬鳥が加わる冬期が多く、さらにこれらに北上する渡りの夏鳥も加わる春期に増加した。個体数では、カワラヒワ、シジュウカラ、スズメ、ムクドリなどの若鳥が加わり採餌に訪れる初夏に多数となった。また、落葉したクロマツとクスノキの高枝に、トビおよびカラスの古巣を散見した。

9. 海老ヶ池地区の記録

当地は、太平洋に面した半島部に、天然の湖沼としては徳島県最大の海老ヶ池と、その周辺のウバメガシを主体とした照葉樹林、浅川湾、原野化した休耕田、公園の芝生広場など多様な環境が存在している。これらの環境を巡るコースで、日本野鳥の会徳島県支部が、毎月1回、午前9時開始で野鳥観察会（探鳥会）を開催している。2年間の調査期間中の探鳥会と、夜間観察を含む随時観察の結果、次の106種の野鳥と外来種2種を記録した。

キジ、オシドリ、オカヨシガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、シマアジ、トモエガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ミコアイサ、カイツブリ、カンムリカイツブリ、キジバト、アオバト、ヒ

メウ、カワウ、ウミウ、ゴイサギ、アオサギ、ダイサギ、コサギ、クロサギ、ヒクイナ、バン、オオバン、ホトトギス、ツツドリ、カッコウ、アマツバメ、メダイチドリ、アカアシシギ、クサシギ、キアシシギ、イソシギ、ウミネコ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ハジロクロハラアジサシ、ミサゴ、ハチクマ、トビ、チュウヒ、ハイタカ、サシバ、ノスリ、フクロウ、アオバズク、カワセミ、アリスイ、コゲラ、アオゲラ、チョウゲンボウ、ハヤブサ、サンショウクイ、コウライウグイス、サンコウチョウ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヤマガラ、シジュウカラ、ツバメ、イワツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、エゾムシクイ、センダイムシクイ、メジロ、オオヨシキリ、セッカ、ムクドリ、コムクドリ、トラツグミ、クロツグミ、マミチャジナイ、シロハラ、アカハラ、ツグミ、コマドリ、ノゴマ、コルリ、ジョウビタキ、イソヒヨドリ、エゾビタキ、サメビタキ、コサメビタキ、キビタキ、オオルリ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ビンズイ、タヒバリ、カワラヒワ、シメ、イカル、ホオジロ、ホオアカ、カシラダカ、ノジコ、アオジ、クロジ、オオジュリン。以下外来種、ドバト（カワラバト）、コジュケイ。106種を主要な生息環境で分類すると、61種が森林あるいは草原の種であり、45種がカモ科（15種）、サギ科（5種）などの水鳥、またはオオヨシキリやセキレイ科など水辺の鳥であった。季節では、上記のカモ科などが越冬渡来する冬期と、繁殖地へ北上する種が増加し、目視だけでなくコルリ（写真15）などさえずりでの確認も可能となる春期に確認種が増加した。当地の1992

～1997年の観察記録（徳島県・（財）日本野鳥の会徳島県支部 第7次鳥獣保護事業における鳥獣生息状況報告書）では、コジュケイを含む99種が報告されている。確認種の少数に差異はあるが、今回の106種と近似した数字である。一方、オシドリ、マガモなどカモ類の最多記録は当時が大きい。池の周回車道完成前の記録も含まれることと、現在はヒシなど水草がほとんど生息していないことが関与していると思われる。

10. 今回の調査で確認した野生鳥獣一覧

今回の調査で、文末に記載した野鳥173種と外来種5種および野生哺乳類9種を確認した。野鳥173種の中、44種が環境省または徳島県のレッドリスト掲載種である。海陽町における野鳥観察記録では既存記録も採用した海南町誌の144種（鈴木1993）、単年度調査の海部町の75種（増谷ほか1987）がある。海部郡の阿波学会記録では、既存記録も含めた牟岐町の129種（小林1977）、単年度調査の由岐町の88種（増谷1994）、日和佐町の133種（東条ほか1997）がある。今回調査で多種が記録された理由として、町の広い面積・標高差や多様な環境の存在に加え、平地の少ない四国東部の太平洋岸にあって、最も広くまとまった海陽町の平地が、長距離を旅する野鳥の休息地となっていることが想定される。

野生哺乳類の確認記録はニホンジカ（写真16）が最多であったが、樹皮の食痕は古いものが多く、剣山周辺と比較すると少なかった。

なお、別添CDには、各種最多5件までの生息確認情報を記載している。



写真15 コルリ雄



写真16 ニホンジカ幼獣

11. おわりに

前述のとおり、本調査において、海陽町および海部郡各町の過去の調査記録の確認種数を超える野鳥の種を記録した。これは、海陽町の自然環境の多様性・豊かさを示唆するものである。その中でも、那賀町境の海部山地は、絶滅危惧種のクマタカおよびヤイロチョウの安定的生息地である。当地での設置計画が発表された大規模風力発電施設の建設は、この2種を含む多種の生物にとっては、生息環境の破壊にほかならない。「カーボン0」で地球環境に優しいとされる風力発電だが、当地にとっては環境負荷が非常に大きな施設および事業であり、計画は中止すべきである。

参考文献

- 環境庁自然保護局計画課自然環境調査室 (1997)：都道府県別メッシュマップ36徳島県，自然環境研究センター
- 環境庁自然保護局野生生物課 (1993)：日本産野生生物目録—本邦産野生動植物の現状—脊椎動物編，自然環境研究センター
- 小林実 (1977)：牟岐町及び周辺の野鳥，郷土研究発表会紀要23，75-82
- 財団法人日本緑化センター (1997)：82 大里松原，身近な松原散策ガイド，91
- 財団法人日本野鳥の会自然保護室 (2003)：シンポジウム「河川に生きるカワウと人との共存の道を探る」実施報告資料集
- 鈴木淳雄 (1992)：海南町の鳥類，海南町総合学術調査報告第二編，53-62，海南町・海南町史編纂委員会
- 東條秀徳 (2009)，鳴門市の野鳥生息状況，阿波学会紀要61，37-48
- 東條秀徳 (2007)，三好市「旧東祖谷山村」の野鳥生息状況，阿波学会紀要53，43-55
- 徳島県 (2019)，令和元年度徳島県鳥獣保護区等位置図
- 徳島県県民環境部環境総局自然環境課 (2011)：徳島県レッドリスト (改訂版) 1. 鳥類，徳島県ホームページ (http://www.pref.tokushima.jp/kankyo/kankoubutu/red_date.html/)
- 徳島県政策創造部地方創生局市町村課 (2020)，令和元年度徳島県市町村要覧，34-35
- 徳島県農林水産部林政課・(財) 日本野鳥の会徳島県支部：第6次鳥獣保護事業における鳥獣生息状況の調査報告書，42-43
- 徳島県農林水産部林業振興課・(財) 日本野鳥の会徳島県支部：第7次鳥獣保護事業における鳥獣生息状況の調査報告書，1-7，31-38
- 日本鳥学会目録編集委員会 (2012)，日本鳥類目録改訂第7版，日本鳥学会
- 日本野鳥の会徳島県支部 (2003)，徳島のタカの渡り，日本野鳥の会徳島県支部
- 増谷正幸ほか (1987)：海部町の鳥類，郷土研究発表会紀要33，93-110
- 増谷正幸ほか (1989)：上那賀町の鳥類，郷土研究発表会紀要35，31-49
- 増谷正幸 (1994)：由岐町の鳥類，阿波学会紀要40，71-92

海陽町の阿波学会調査で生息確認した野生鳥獣一覧 (2018年9月~2020年8月)

※備考：番号左のRは、国または県のレッドリスト種を，特は，特定外来生物であることを示す。

野鳥

- | | |
|---|---|
| ◎ キジ目 GALLIFORMES | ◎ カイツブリ目 PODICIPEDIFORMES |
| ○ キジ科 Phasianidae | ○ カイツブリ科 Podicipedidae |
| 1 ヤマドリ <i>Syrnaticus soemmerringii</i> | 20 カイツブリ <i>Tachybaptus ruficollis</i> |
| 2 キジ <i>Phasianus colchicus</i> | 21 カンムリカイツブリ <i>Podiceps cristatus</i> |
| ◎ カモ目 ANSERIFORMES | ◎ ハト目 COLUMBIFORMES |
| ○ カモ科 Anatidae | ○ ハト科 Columbidae |
| R 3 オシドリ <i>Aix galericulata</i> | 22 キジバト <i>Streptopelia orientalis</i> |
| 4 オカヨシガモ <i>Anas strepera</i> | R 23 シラコバト <i>Streptopelia decaocto</i> |
| 5 ヨシガモ <i>Anas falcata</i> | 24 アオバト <i>Treron sieboldii</i> |
| 6 ヒドリガモ <i>Anas penelope</i> | ◎ カツオドリ目 SULIFORMES |
| 7 マガモ <i>Anas platyrhynchos</i> | ○ ウ科 Phalacrocoracidae |
| 8 カルガモ <i>Anas zonorhynchos</i> | R 25 ヒメウ <i>Phalacrocorax pelagicus</i> |
| 9 ハシビロガモ <i>Anas clypeata</i> | 26 カワウ <i>Phalacrocorax carbo</i> |
| 10 オナガガモ <i>Anas acuta</i> | 27 ウミウ <i>Phalacrocorax capillatus</i> |
| 11 シマアジ | ◎ ペリカン目 PELECANIFORMES |
| R 12 トモエガモ <i>Anas formosa</i> | ○ サギ科 Ardeidae |
| 13 コガモ <i>Anas crecca</i> | 28 ゴイサギ <i>Nycticorax nycticorax</i> |
| 14 ホシハジロ <i>Aythya ferina</i> | 29 ササゴイ <i>Butorides striata</i> |
| 15 キンクロハジロ <i>Aythya fuligula</i> | 30 アマサギ <i>Bubulcus ibis</i> |
| 16 スズガモ <i>Aythya marila</i> | 31 アオサギ <i>Ardea cinerea</i> |
| 17 シノリガモ <i>Histrionicus histrionicus</i> | 32 ダイサギ <i>Ardea alba</i> |
| 18 ミコアイサ <i>Mergellus albellus</i> | R 33 チュウサギ <i>Egretta intermedia</i> |
| 19 ウミアイサ <i>Mergus serrator</i> | 34 コサギ <i>Egretta garzetta</i> |
| | 35 クロサギ <i>Egretta sacra</i> |

◎ ツル目 GRUIFORMES

○ クイナ科 Rallidae

- R 36 ヒクイナ *Porzana fusca*
37 バン *Gallinula chloropus*
38 オオバン *Fulica atra*

◎ カッコウ目 CUCULIFORMES

○ カッコウ科 Cuculidae

- R 39 ジュウイチ *Hierococcyx hyperythrus*
40 ホトトギス *Cuculus poliocephalus*
41 ツツドリ *Cuculus optatus*
42 カッコウ *Cuculus canorus*

◎ ヨタカ目 CAPRIMULGIFORMES

○ ヨタカ科 Caprimulgidae

- 43 ヨタカ *Caprimulgus indicus*

◎ アマツバメ目 APODIFORMES

○ アマツバメ科 Apodidae

- 44 ハリオアマツバメ *Hirundapus caudacutus*
45 アマツバメ *Apus pacificus*
46 ヒメアマツバメ *Apus nipalensis*

◎ チドリ目 CHARADRIIFORMES

○ チドリ科 Charadriidae

- 47 タゲリ *Vanellus vanellus*
R 48 ムナグロ *Pluvialis fulva*
R 49 イカルチドリ *Charadrius placidus*
50 コチドリ *Charadrius dubius*
51 メダイチドリ *Charadrius mongolus*
R 52 オオメダイチドリ *Charadrius leschenaultii*

○ セイタカシギ科 Recurvirostridae

- R 53 セイタカシギ *Himantopus himantopus*

○ シギ科 Scolopacidae

- R 54 ヤマシギ *Scolopax rusticola*
R 55 オオジシギ *Gallinago hardwickii*
56 チュウジシギ *Gallinago megala*
57 タシギ *Gallinago gallinago*
58 チュウシャクシギ *Tringa totanus*
R 59 アカアシシギ *Tringa ochropus*
60 クサシギ *Tringa glareola*
61 タカブシギ *Heteroscelus brevipes*
62 キアシシギ *Xenus cinereus*
63 ソリハシシギ *Actitis hypoleucos*
64 イソシギ *Calidris subminuta*
R 65 オジロトウネン *Calidris temminckii*
66 ヒバリシギ *Phalaropus lobatus*
R 67 ウズラシギ *Glareolinae*
68 アカエリヒレアシシギ *Glareola maldivarum*

R ○ ツバメチドリ科 Glareolidae

- 69 ツバメチドリ *Glareola maldivarum*

○ カモメ科 Laridae

- 70 ウミネコ *Larus crassirostris*
71 セグロカモメ *Larus argentatus*
72 オオセグロカモメ *Larus schistisagus*
R 73 クロハラアジサシ *Chlidonias hybrida*
R 74 ハジロクロハラアジサシ *Chlidonias leucopterus*

◎ タカ目 ACCIPITRIFORMES

○ ミサゴ科 Pandionidae

- R 75 ミサゴ *Pandion haliaetus*

○ タカ科 Accipitridae

- R 76 ハチクマ *Pernis ptilorhynchus*
77 トビ *Milvus migrans*

- R 78 チュウヒ *Circus spilonotus*
79 ツミ *Accipiter gularis*
R 80 ハイタカ *Accipiter nisus*
R 81 オオタカ *Accipiter gentilis*
R 82 サシバ *Butastur indicus*
83 ノスリ *Buteo buteo*
R 84 クマタカ *Nisaetus nipalensis*

◎ フクロウ目 STRIGIFORMES

○ フクロウ科 Strigidae

- 85 フクロウ *Strix uralensis*
R 86 アオバズク *Ninox scutulata*

◎ サイチョウ目 Bucerotiformes

○ ヤツガシラ科 Upupidae

- 87 ヤツガシラ *Upupa epops*

◎ ブッポウソウ目 CORACIIFORMES

○ カワセミ科 Alcedinidae

- 88 アカショウビン *Halcyon coromanda*
89 カワセミ *Alcedo atthis*
R 90 ヤマセミ *Megaceryle legubris*

◎ キツツキ目 PICIFORMES

○ キツツキ科 Picidae

- 91 アリスイ *Jynx torquilla*
92 コゲラ *Dendrocopos kizuki*
R 93 オオアカゲラ *Dendrocopos leucotos*
94 アオゲラ *Picus awokera*

◎ ハヤブサ目 FALCONIFORMES

○ ハヤブサ科 Falconidae

- 95 チョウゲンボウ *Falco tinnunculus*
96 チゴハヤブサ *Falco subbuteo*
R 97 ハヤブサ *Falco peregrinus*

◎ スズメ目 PASSERIFORMES

○ ヤイロチョウ科 Pittidae

- R 98 ヤイロチョウ *Pitta nympha*

○ サンショウクイ科 Campephagidae

- 99 サンショウクイ *Pericrocotus divaricatus*

○ コウライウグイス科 Oriolidae

- 100 コウライウグイス *Oriolus chinensis*

○ カササギヒタキ科 Monarchidae

- 101 サンコウチョウ *Terpsiphone atrocaudata*

○ モズ科 Laniidae

- 102 モズ *Lanius bucephalus*

○ カラス科 Corvidae

- 103 カケス *Garrulus glandarius*
104 ハシボソガラス *Corvus corone*
105 ハシブトガラス *Corvus macrorhynchos*

○ キクイタダキ科 Regulidae

- 106 キクイタダキ *Regulus regulus*

○ シジュウカラ科 Paridae

- 107 コガラ *Poecile montanus*
108 ヤマガラ *Poecile varius*
109 ヒガラ *Periparus ater*
110 シジュウカラ *Parus minor*

○ ヒバリ科 Alaudidae

- 111 ヒバリ *Alauda arvensis*

○ ツバメ科	Hirundinidae	143 ジョウビタキ	<i>Phoenicurus auroreus</i>
112 ツバメ	<i>Hirundo rustica</i>	144 ノビタキ	<i>Saxicola torquatus</i>
R 113 コシアカツバメ	<i>Hirundo daurica</i>	145 イソヒヨドリ	<i>Monticola solitarius</i>
114 イワツバメ	<i>Delichon dasypus</i>	146 エゾビタキ	<i>Muscicapa griseisticta</i>
○ ヒヨドリ科	Pycnonotidae	R 147 サメビタキ	<i>Muscicapa sibirica</i>
115 ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	148 コサメビタキ	<i>Muscicapa dauurica</i>
○ ウグイス科	Sylviidae	149 キビタキ	<i>Ficedula narcissina</i>
116 ウグイス	<i>Cettia diphone</i>	150 オオルリ	<i>Cyanoptila cyanomelana</i>
117 ヤブサメ	<i>Urosphena squameiceps</i>	○ イワヒバリ科	Prunellidae
○ エナガ科	Aegithalidae	151 カヤクグリ	<i>Prunella rubida</i>
118 エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>	○ スズメ科	Passeridae
○ ムシクイ科	Phylloscopidae	152 スズメ	<i>Passer montanus</i>
119 オオムシクイ	<i>Phylloscopus examinandus</i>	○ セキレイ科	Motacillidae
R 120 エゾムシクイ	<i>Phylloscopus borealoides</i>	153 キセキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>
121 センダイムシクイ	<i>Phylloscopus coronatus</i>	154 ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>
○ メジロ科	Zosteropidae	155 セグロセキレイ	<i>Motacilla grandis</i>
122 メジロ	<i>Zosterops japonicus</i>	156 ビンズイ	<i>Anthus hodgsoni</i>
○ ヨシキリ科	Acrocephalidae	157 タヒバリ	<i>Anthus rubescens</i>
123 オオヨシキリ	<i>Acrocephalus orientalis</i>	○ アトリ科	Fringillidae
○ セッカ科	Cisticolidae	158 アトリ	<i>Fringilla montifringilla</i>
124 セッカ	<i>Cisticola juncidis</i>	159 カワラヒワ	<i>Chloris sinica</i>
○ レンジャク科	Bombycillidae	R 160 マヒワ	<i>Carduelis spinus</i>
125 ヒレンジャク	<i>Bombycilla japonica</i>	161 ベニマシコ	<i>Uragus sibiricus</i>
○ ゴジュウカラ科	Sittidae	162 ウソ	<i>Pyrrhula pyrrhula</i>
126 ゴジュウカラ	<i>Sitta europaea</i>	163 シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes</i>
○ キバシリ科	Certhiidae	164 イカル	<i>Eophona personata</i>
R 127 キバシリ	<i>Certhia familiaris</i>	○ ホオジロ科	Emberizidae
○ ミソサザイ科	Troglodytidae	165 ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>
128 ミソサザイ	<i>Troglodytes troglodytes</i>	166 ホオアカ	<i>Emberiza fucata</i>
○ ムクドリ科	Sturnidae	167 カシラダカ	<i>Emberiza rustica</i>
129 ムクドリ	<i>Spodiopsar cineraceus</i>	168 ミヤマホオジロ	<i>Emberiza elegans</i>
130 コムクドリ	<i>Agropsar philippensis</i>	R 169 ノジコ	<i>Emberiza sulphurata</i>
131 ホシムクドリ	<i>Sturnus vulgaris</i>	R 170 アオジ	<i>Emberiza spodocephala</i>
○ カワガラス科	Cinclididae	R 171 クロジ	<i>Emberiza variabilis</i>
132 カワガラス	<i>Cinclus pallasii</i>	172 オオジュリン	<i>Emberiza schoeniclus</i>
○ ヒタキ科	Muscicapidae	173 シベリアジュリン	<i>Emberiza pallasi</i>
R 133トラツグミ	<i>Zoothera dauma</i>	(外来種・野生化種)	
134 クロツグミ	<i>Turdus cardis</i>	1 コジュケイ	<i>Bambusicola thoracicus</i>
135 マミチャジナイ	<i>Turdus obscurus</i>	2 ドバト	<i>Columba livia</i>
136 シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>	3 アイガモ	<i>Anas platyrhynchos</i>
R 137 アカハラ	<i>Turdus chrysolaus</i>	4 ヒゲガビチョウ	<i>Garrulax cineraceus</i>
138 ツグミ	<i>Turdus naumanni</i>	5 ソウシチョウ	<i>Leiothrix lutea</i>
R 139 コマドリ	<i>Luscinia akahige</i>		
140 ノゴマ	<i>Luscinia calliope</i>		
141 コルリ	<i>Luscinia cyane</i>		
R 142 ルリビタキ	<i>Tarsiger cyanurus</i>		

野生哺乳類

- 1 ニホンザル [サル目 (霊長目) オナガザル科]
- 2 ニホンリス [ネズミ目 (嚙歯目) リス科]
- 3 ノウサギ [ウサギ目 ウサギ科]
- 4 タヌキ [ネコ目 (食肉目) イヌ科]
- 5 イタチ [ネコ目 (食肉目) イタチ科]
- 6 アナグマ [ネコ目 (食肉目) イタチ科]
- 7 ハクビシン [ネコ目 (食肉目) ジャコウネコ科]
- 8 イノシシ [ウシ目 (偶蹄目) イノシシ科]
- 9 ニホンジカ [ウシ目 (偶蹄目) シカ科]

Status of Wild Birds in Kaiyo Town

TOUJOU Hidenori*, MITUI Masao, HAMADA Hiroshi, SHIRAIISHI Hisao, HINOMIYA Kohei, MIYAKE Takeshi, TAKAI Masaaki and YAMASHITA Takumi

* 24-77, Sangenyacho-soto, Tokushima 770-8025, JAPAN

Proceedings of Awagakakai, No.63 (2021), pp.119-130.